

庶務幹事この一年

庶務幹事を交代するに当たって

高エネルギー物理学研究所 小林 正典

思い返せば、1995年の初めに開催された放射光学会総会の直前に、前庶務幹事の小杉さんから「事務引継をしたい」との連絡を突然受けたことが出発点であった。放射光学会のもろもろの区切りが、カレンダーイヤー区切りに変更になった年であったため、1995年4月から1996年12月までの庶務幹事としての仕事をスタートさせた。

前庶務幹事の小杉さんから引き継いだ庶務幹事の仕事に名簿の作成があった。1995年中に会員の皆様と連絡を取り、それまでのB5版からA4版に変更し、卒業年次やe-mail addressもつけ加え充実させ「日本放射光学会会員名簿1995」として1996年1月に発行した。会員との連絡および編集の作業が事務局スタッフの通常業務に加算されたわけで、事務局スタッフの努力によって会員の皆様に配付することができた。

前会長からの引継課題に若手奨励賞の検討と制定があった。第27回評議員会において賞の性格付けを議論していただいた後、幹事会での検討と評議員会議での議論を重ね、第31回評議員会において「若手奨励賞」として制定することができた。会則に則って放射光学会会長の冨家先生が選考委員会委員長を務める選考委員会での結果は、1997年1月の総会において第1回若手奨励賞受賞者として発表された。

会員の管理は庶務幹事の仕事であるが、この期の終わる1996年12月には会員数が1000人の大台

を越えることになった。安藤行事幹事のサジェスチョンや事務局の勧誘運動の成果である。

この2年間に開催された評議員会議は7回あるが、その円滑な運営は1995年5月19日に開催された第27評議員会において議長に選出された東京工業大学の旗野先生のご尽力によっている。庶務幹事としてことのほか感謝いたします。

この期に放射光学会の執行部の一員としての庶務幹事からみた放射光学会について、個人的感想を少し書いてみます。

放射光学会がすでに存在し、運営されている状況での課題として、評議員の出身分野の問題があります。学会の構成員の研究者から選出された評議員の専門分野が、適度にバランスし学会運営に適正に反映されているか、という指摘がありました。放射光学会がいつの時代においても中立性を保ちつつ、健全に運営されるためには幅広い偏りのない会員の意向の反映が大切なのは当然です。適正なバランスがどのへんにあるのか、新しい期において議論がなされることを期待します。

次の課題は、学会の存在の重さについてです。すなわち、放射光学会は会員からどの程度強くその存在を意識し、求められているか、ということです。会員の選挙によって選ばれた評議員にも意識の変化が見られます。具体的には、この期に開催された評議員会議への評議員の出席状況および成立状況を振り返るとき、学会の存在の重さが軽

くなってきているように思われます。会員数が大きくなるにつれて、学会が生み出されるとき的情熱とは裏腹に、学会の存在理由が軽くならなければよいのですが。他に例を見ないほど多数の分野、小規模科学を構成母体としている放射光学会が会員の意識をそろえるのは容易ではありません。しかし、小規模ではあっても多数の分野が健全に成長して行くには、学会の存在理由を会員に繰り返し訴え、時として他の学協会と考えを戦わせるほどの能力を持つことも重要だと思いますがい

かがでしょうか。

任期を終わるに当たり、前任者からの課題を含めどうか責務を果たすことができたかなと思えるのは、富家会長をはじめ他の幹事の方々のご指導・ご協力によるものです。深く感謝いたします。また、特に庶務幹事としては、西野さんをはじめとする放射光学会事務局の方々の努力貢献に負うことが大でありました。あらためてお礼申し上げます。

1996年度幹事報告

行事幹事この一年

高エネルギー物理学研究所 安藤 正海

この1年間の活動報告をします。

前年度に企画した「検出器」講習会が1996年2月7-9日葉山総研大キャンパスで、また「コヒーレント光」国際ワークショップが2月29日-3月1日にKEKで行なわれ、双方とも大変好評でした。講習会は雨宮慶幸委員長、鈴木昌世(JASRI)、浅野芳裕(原研)各委員の大きな骨折りで成功しました。アンケートでも好評であったことがうかがえ、継続を望む声が多くありました。プロシーディングス出版の話も出ています。

国際ワークショップは平井康晴(日立基礎研)副委員長、山本 樹(KEK)、合澤清志(川崎重工)、籠島 靖(KEK 現姫工大)、加藤政博(KEK)、宮原恒晃(KEK 現都立大)、水木純一郎(NEC 現原研)、並河一道(東京学芸大)、高山健(KEK)、浦川順治(KEK)各委員の格別

の働きで開催されました。第4世代の1つの大きな流れになると思われる“コヒーレント光の開発に関して日本も名乗りを挙げた”ということができます。ワークショップは50名程度が議論・討論が沸いて最適かと思いますが、100名を超えてしまいました。プロシーディングスは出版され、関係者には12月初旬に配布済です。残部は放射光学会事務局から有料で入手可能です。なお国際的にも注目され Kwang-Je Kim, 水木純一郎、山本樹の印象記が Synchrotron Radiation News に掲載予定です。

今年新規に企画したものはありません。

第10回日本放射光学会・放射光科学合同シンポの企画に関しては規定コースにのってものごとはスムーズに動きました。昨年は合同シンポが継続されるのか、されないのかの緊迫した状況がありましたが、これを乗り越えました。「雨降って

地固まる」といきたいと思います。もともと4放射光施設もち廻りに近い形で開催が決まったいきさつがあります。今回は物性研軌道放射光施設が引き受けてくださり、後には物性研高輝度放射光プロジェクトがオール東大になったため東大全体が当番となりました。太田俊明実行委員会委員長(東大)をヘッドに神谷幸秀(東大物性研)他7人の委員会が構成され精力的に準備が続けられました。プログラム委員会は羽生隆昭委員長(都立大)以下18人のもとにいいプログラムができました。

PF シンポは「合同シンポの中で行なう部分」と「KEK で行なう部分」に分けて開催するという線におちつき、今年の KEK でのシンポは12月16, 17日に既に開催されました。

さて1年前と同じ感想をもっているのだから次へのべさせていただきます。

行事幹事が2年の任期であるのは助かります。1年目で企画して2年目に刈り入れになるからです。私にとっては次々に企画を打ち出すことは難しく、1期で十分でした。短い中で企画力を発揮するためには、行事委員会の中で役割分担をするのもよいかもしれません。行事委員会が受け持つ機能は(1)合同シンポの企画、(2)独自の企画かと思えます。さらには(3)アジアフォーラムの企画も1997年から加わると聞いております。それぞれに副委員長を設けて担当するほどの大きさかと思

います。独自の企画の中には遠い将来を見据えた企画も望まれることでしょう。

行事関係で殆ど議論できていない問題の中には「合同シンポジウムの純益をどのように有効利用するのか」があります。1度だけ合同シンポの組織委員会において議論しました。(1)黒字がでた場合には、剰余金を共催団体にどのように割り降りするのか、(2)赤字が出た時には、誰が責任をとるのか等、金銭にまつわる話題はつきません。時間をかけて整理する必要があります。この背景には「放射光学会と各施設・各利用者懇談会の関係」を納得する形で定義づける必要があります。さらには金銭哲学が入り込んでおります。「宵越しの銭はもたない」のか「子孫に美田を残す」のかのどちらを選択するかです。あるいはそれ以前の問題があるのかを次期会長を初めとする幹事会を中心にデータを集めて評議委員会でよく議論くださることを望みます。放射光学会の大きい発展のために継続的に有効な議論に期待したいところです。

最後に事務局には大変お世話になりました。“放射光科学をもり立てて何とか1人歩きのできるようにしてあげたい。”このように考えて下さる事務局があり、私ども会員は幸せと思えます。楽しく仕事をさせて頂き、どうもありがとうございました。

編集幹事この一年

東京大学物性研究所 神谷 幸秀

優れた編集手腕を発揮されました前編集幹事の浜谷さんの後を受けて、何とも心許ない出発ではありましたが、事務局の全面的なバックアップ、編集委員や執筆者の方々、さらには記事の提案をしていただいた皆様のご支援の下に、何とか1年目を乗り越えることができました。年5回の会誌の発行も無事に行なうことができました。

編集幹事「見習い」を昨年1年間させていただきましたが、いざ「見習い」でなくなってみると、これまで事務局や編集委員の皆様が如何にたいへんな努力をされて、この会誌「放射光」を発行してきたかということを感じさせられました。

当初は、浜谷さんと前編集委員会が残された財産(記事)をたちまち食いつぶしてしまうのではないかという不安にかられましたが、この一年を振り返ってみますと、(学会の財政を圧迫するほどの)内容の充実した会誌を発行することができ

たと思っております。これもひとえに、執筆者の皆様、事務局や編集委員の皆様のご努力のおかげです。特に、特集号「高輝度X線(I)」の企画に際し、SPring-8の関係者の方々には、完成間近のお忙しい中、たいへんなご無理を聞いていただきました。ここに、改めて感謝を申し上げます。

来期は、10-2号にMR放射光利用に関する特集「高輝度X線(II)」を企画しております。その他の号の記事数につきましては、現状では、見通しがあまり明るくありません。いろいろな分野の皆様からの記事の提案をお待ちしております。身近の編集委員や事務局に気軽にご相談下さい。

最後になりましたが、我が国の放射光科学と会誌の発展のために、会員の皆様からの今一層のご支援をお願いいたしまして、編集幹事この一年の報告とさせていただきます。

渉外幹事この一年

東北大学電気通信研究所 庭野 道夫

昨年度に引き続き渉外幹事を務めさせていただきました。渉外幹事の日常的な仕事は、他の学・協会などからの後援・共催依頼を、会長や事務局等と協議しながら処理することです。この1年に協賛・後援依頼は数十件ありましたが、ほとんどがこれまでも依頼があったもので、問題なく処理できました。中には放射光と直接関係のないシンポジウムの協賛依頼もありましたが、これまでも協賛していたという実績も考えて受諾の返事を出しました。放射光研究者の裾野を広げるために、できるだけ多くの機会を利用して、まず放射光学会の存在を知ってもらう事も必要であると考えています。

昨年度開設した学会のホーム・ページもそろそろ会員の皆様に定着している頃かと思います。英

語版のホーム・ページの作成も含め、ホーム・ページの内容充実が今年度の課題でしたが、残念ながら残り残りのまま任期が終わってしまいました。また、アクセスのし易さ等のハード・ウェア上の問題も残っています。次期の幹事に奮闘努力をお願いしたいと思います。

2年間はあっという間で、富家会長から幹事をやってくれとのご依頼があったのがついこの間のことのように思えます。最初は学会のことが何も分からない状態でしたが、この2年間に学会運営についてたくさんの方の事を勉強させていただきました。学会の仕事は全くのボランティア・ワークですが、この世知辛い世の中で、一つでもこのような仕事を残していくことは非常に大事な事だと思っています。

会計幹事この一年

東京大学物性研究所 柿崎 明人

会計幹事としての2年が過ぎた。昨年、この欄で申し上げたように、学会の会計事務はすべて事務局で処理されており、幹事の仕事は学会の将来の発展を考えて財政全般について目を配ることである。学会の将来のあるべき姿については、多くの会員によって、いろいろな機会にさまざまな形で議論されている。ここではこの1年の間に議論がスタートした学会の法人化について述べることにする。

現在、学会の会員数は1000名の大台に達し、来年学会は、設立10周年を迎える。設立以来学会は、既存の研究分野を縦横に駆け巡る個性を發揮して、その活動規模は当初の見込みをはるかに越えて（と、私は個人的に思っている）拡大している。放射光にかかわる研究者・技術者は今後とも増加していくと考えられ、会員数の増加に適應して学会の機能を充実させていくことは、学会の将来の健全な発展のために不可欠である。学会が、特定の研究分野の同好会的な集団から発展して、社会的にも独立した人格を持つ研究者の集団として認知されるためには、放射光学会の社団法人化が今後かならず問題となるであろうと考え、昨年からは法人化のための準備作業と議論をスタートさせた。

法人化によるメリットは、上記の社会的に認知されることのほかに、募金団体になれることなど、数多い。その反面、法人化によって同好会的な雰囲気は薄れることも考えられる。また、社団

法人となるための条件（会員数が1000名を越えていること、十分な自己資金を有することなど）をクリアしなければならず、法人化によって所轄監督官庁の干渉を受けやすくなるなどの問題点も多い。学協会のなかには、法人化のメリット・デメリットを見比べて、法人格をもたないことを決めているところもある。一方、日本放射光学会は、設立当初から法人化を考えていたともいわれ、実際に学会の組織・運営形態は、法人化に際して支障がないように配慮されている。

昨年は、法人化を考える初年度と位置づけ、評議員会を中心に学会の法人化について考えはじめさせていただくことにした。しかし、幹事の勉強不足のために有効な議論に結び付く前の段階で任期を終えることになり、次期会計幹事に引き続きこの問題を考えていただくことになった。自己資金に学会の行事特別勘定をあてる件については、その帰属をめぐる異論・反論・オブジェクションが続出している。学会の法人化の議論は、そのまま会員一人ひとりの学会に対する意識改革にもつながるだけに、今後とも時間をかけて十分な議論をしていただくようお願いしたい。

この2年間、いやそのずっと以前から西野さんをはじめ事務局の方々には大変お世話になった。彼女たちの努力によって学会が支えられている、と言っても過言ではないと思う。心からお礼を申し上げる。本当にありがとう。